

KDKニュース

国内開拓伝道会 Vol. 139

KDKの3つの原則

1. 開拓伝道であること
2. 教会を建てあげること
3. 聖書信仰に立つ教団・教派との協力

巻頭言

KDK会長 嵐時雄



「この水を飲む人はみな、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」（ヨハネの福音書 4:13-14）

これは、町から遠く離れた井戸に水を汲みに来たサマリア人の女性に、イエス様が語りかけたことばです。ご存じのように、当時、ユダヤ人とサマリア人は付き合いをしないことが普通でした。それぞれの民族に、歴史的バックグラウンドがあり、それが互いの交流を妨げていました。しかしイエス様は、民族のそういった壁を越えて、先にこの女性に声をかけられました。彼女のうちに「満たされていないもの」があるのをご存じであったからです。

この女性は私生活において、たくさんの課題を抱えていました。結婚のことを含めた彼女の家庭生活は、お世辞にもうまくいっているとは言えませんでした。時には、人の讐感を買うようなこともあったことと思います。炎天下に水を汲みに来たのも、町の人々と顔を合わせるのを避けるためであったのでしょう。そもそもだれもいないであろう井戸に、水を汲みに来たのは、それらのことをひととき忘れるためであったのかもしれません。イエス様は、その彼女とのさまざまな会話を通して、彼女の内の肉的な求めを霊的な領域へと引き上げました。そして最終的に彼女のうちに霊的ないのちを求める思いを吹き込まれました。それはイエス様が、この女性の最も必要としているもの

が何であるのかを、よく知っておられたからです。

1994年から22年間、長野県の小海町で開拓伝道をされた水草修治師は、開拓当初から「通信小海」という伝道新聞を発行しておられました。それを毎月5000部（後に7,000部）、人口25,000人の町に、新聞折り込みや手渡しなどで配布し続けました。

その「通信小海」は、最終的には二七〇号、190万余りが配布されました。その新聞には人々の興味を引く話題や時事に関することも掲載されましたが、聖書のことば、福音そのものが毎号必ず記されていました。小海町に住む人々の真の必要がそこにあったからです。

*詳細は、水草修治著「わたしは山に向かって目を上げる―信州南佐久における宣教と教会開拓―」（地引網出版）をご参照ください

開拓教会においては、人々に教会を認知してもらい、教会に対して親しみを持っていただくために、コンサートや絵画展といったさまざまなイベントを催すことがあります。それらのことは効果的に用いることによって、地域における教会の認知度を上げたり、伝道者と人々との接点を増やしたりすることに役立ちます。ただ、その後、福音を提示することは、それほど簡単ではありません。イエス様はサマリア人の女性に向かって、「わたしに水を飲ませてください」と語りかけて会話をスタートなさいました。その第一声には、彼女のたましいをご自身が提供する救いへ導くという明確な目標が含まれていました。

開拓に限ることなくすべての教会には「世の人にキリストの福音を提示する」という明確な目標と使命が与えられています。そこにブレがあってはならないと思います。

福音は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。（ローマ人への手紙1:16）

目次

- 1 P・・・巻頭言：嵐時雄（KDK会長）
- 2 P・・・開拓者の近況：大喜多師、中山師、瓜生師
- 3 P・・・開拓者セミナーin 沖縄案内、受給終了者の証し
- 4 P・・・OBからのお便り（高橋師）、事務局からのお知らせ



国内開拓伝道会（KDK）

発行：2025年3月20日

発行：会長 嵐時雄

WEB：http://kdk.asia

振替：00140-6-57493